

1. 平成29年度水質概要

大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端に位置し、周辺部を高崎山、九六位山、霊山、鎧ヶ岳、樅木山などの山々が連なり、市域の半分を森林が占めるなど豊かな緑に恵まれている。これらの山々を縫うように県下の二大河川である大野川と大分川が南北に貫流しながら別府湾に注いでいる。その下流部には大分平野を形成しており、海岸部においては、北部沿岸海域は水深が深く、東部海岸は豊予海峡に面したリアス式海岸で天然の良港となっている。

市域は東西50.8km、南北24.4km、面積502.39km²と九州でも有数の広い市となっている。また、気象は瀬戸内海気候に属し、温暖で、自然条件に恵まれた地域である。

平成17年1月1日佐賀関町、野津原町と合併して新大分市が発足して以来、整備事業が進められ、平成30年3月31日の時点で、8浄水場を有し、10の水道水源から取水している。

平成27年度には大分川表流水を原水とした、えのくま浄水場水系の給水栓でトリクロロ酢酸が基準値の70%を超える濃度で検出されるなど、消毒副生成物の対策が課題となった。そうしたことから、平成28年度は仮設の中間塩素注入設備の導入や粉末活性炭の適切な注入率を持続させることで、消毒副生成物の低減化を図った。さらに、平成29年度についても、引き続き必要に応じた中塩素注入を行うことにより、消毒副生成物の生成抑制を図った。

また、平成26年度に大分川水系において発生した大規模な臭気障害は発生せず、水道水質は概ね良好であった。